

第6回万葉文化館主宰共同研究 神話の視覚化に関する比較文化的研究 —記紀万葉を軸に—〈概要報告〉

井上 さやか

1 はじめに

本共同研究は、「神話の視覚化に関する比較文化的研究—記紀万葉を軸に—」というテーマを掲げて、平成29年度・30年度の2年に亘り実施した。

テーマ設定の契機は、国外の方々との雑談等の中で、日本文化が異なるルーツを持つ複数の文字や宗教を内包しつつ矛盾なく成立していることの不思議を問われる機会に何度も遭遇した経験にある。第5回万葉文化館主宰共同研究「海外における記紀万葉の受容に関する比較研究—翻訳にあらわれる日本文学の特徴について—」（平成26年度・27年度実施）⁽¹⁾では、明治時代以降、いわゆる「お雇い外国人」らによって万葉歌や記紀神話が日本文化の特徴として多様な言語に翻訳され海外に紹介された事例などから、日本の「神」の概念を異文化のことばに置き換えることの困難さがあらためて浮き彫りとなり、⁽²⁾それらに附された挿絵なども興味深く思われた。

「神話」は言語の産物であるとともに、^{イメージ}画像を伴うものでもある。近年、インドネシアで発見された4万4千年以上前の洞窟壁画は、物語性のある絵として世界最古という。⁽³⁾木村重信著『はじめにイメージありき』に依れば、原始の人間はイメージによって内的世界と外的世界に関わる内容と意味との関連づけをおこなったといい、⁽⁴⁾解剖学者で美術批評家でもある布施英利氏は、そこに「ない」ものをイメージする力には聴覚言語（話し言葉）を使う能力が必須であると指摘する。⁽⁵⁾本共同研究は、そうした知見を踏まえつつ文学の根源に関わる問題として提起した。遺伝子学的人類史とビッグデータ活用による神話モチーフの世界規模での分布状況を研究する「世界神話学」⁽⁶⁾も念頭にあった。

記紀神話が明治期や戦前・戦中に恣意的に再構築され政治利用された際、広く一般に普及したのにも「視覚化」の効力が一役買っていたことは、すでに及川智早氏によって指摘されているところである。⁽⁷⁾さらに国外事例との比較研究をしようとするれば、多分野の研究者による共同研究が必須であり、当館が目指す国際的・学際的・人間的な研究として相応しいテーマでもあると考えた。

そこで、研究を実質的に牽引していただける、比較神話学・宗教学がご専門の松村一男氏（和光大学教授）、近世絵画を中心とした日本美術史がご専門の菅原真弓氏（大阪市立大学教授）にご協力を仰ぎ、当館研究員である大谷歩（上代文学・日中比較文学）、吉原啓（日本古代史）、井上（日本文学・日本文化）の5名で共同研究を開始した。

2 「神話」とはなにか

本共同研究ではまず、日本国内外において『古事記』『日本書紀』『万葉集』などが視覚化された事例について取り上げ、各時代の人々が『古事記』『日本書紀』『万葉集』などとどう向き合い視覚化してきたのかについて考えようとし、あわせて、比較対照のために各国や地域の文化における「神話」の「視覚化」例も取り上げて、個々の事例が有する固有性と国際的な普遍性について考究することを目指した。

それは、「神話」とはなにか、何をもって「視覚化」ととらえるか、ということを議論していくことでもあった。

まず問題となったのは、「神話」とはなにかということである。本共同研究において根幹となる議論ではあったが、「神話」を定義することがいかに困難なことであり、専門外の者が立ち入るのがいかに無謀であったか、早々に痛感させられた。松村氏の御著書には次のように示されている。

「神話」の定義は研究者によって千差万別であり、唯一絶対で決定的なものはない。(中略) 神話の研究者たちはみな自分好みの神話のイメージと定義をもって研究をしていて、神話という実態が仮にあるとしても、それぞれの一部を拡大、強調していて、それらが百花繚乱のごとく競い合っているのだ。(中略)

このように考えると、神話とは「個人ではなく、集団や社会が神聖視する物語であり、作者は問題とならず、成立した年代は不明で——その結果——太古に成立したとされる」とまとめることができる。そして、この定義の後半部分で述べた無名性、無時間性=非歴史性をどのように解釈するかによって、神話学における解釈の多様性が生じると思われるのである。

(『神話学講義』角川書店刊1999年「まえがき」)⁽⁸⁾

以上は「仮説的定義」との断り書きがあるものの、専門外の筆者にも理解できる「神話とはなにか」という問いに対する答えであった。

そこで本共同研究においては、記紀神話に限定することをせず、また文字資料として確認される「神話」にも限定せず、「神話」を「集団や社会が神聖視する物語」と広くとらえて進めることとした。

3 なにを「視覚化」ととらえるか

次に問題となったのは、なにをもって「視覚化」とみるのか、という点である。

「神話」の「視覚化」としてまず想起されたのは、従来指摘のある近世における浮世絵の一部や、近代における「歴史画」という西洋的な概念の移入によってもたらされた絵画作品であり、それらに先行する「彦火火出見尊絵巻」(12世紀頃)などの資料であった。

しかしながら、「神話をどう視覚化したか」とは「神話をどう記録・記憶したか」を問うことでもあるといえる。神名にそれがどのような性格を有する神であるかが象徴される場合があるように、ひとつの神像の造形にはその神の神格とそれを担保するエピソードが紐付いていたと考えられる。そのエピソードが文字資料などの記録として現存せず、記憶として失われていたとしても、何らかの「神話」が付随していた可能性は高いのではなからうか。絵画作品だけでなく、彫刻などの立体美術や、舞踊・演劇などの身体芸術、音楽などの時間芸術も含み、庭園や建築物などにみえる異界観の表出も射程にあった。そこに現代の感覚でいうストーリー性が見出せるか否かは、それぞれの表現手法に拠るところが大きい。これらすべてを本共同研究で取り扱うことはできなかったが、「神話」を広くとらえるとともに、「視覚化」についても平面美術だけにこだわらない方針を採った。

そこで、前掲の共同研究者に加え、橋本裕之氏(元追手門学院大学教授)に儀礼や芸能における事例について、君島彩子氏(国際日本文化研究センター博士課程)に仏像について、橋本裕行氏(檀原考古学研究所企画課長)と桑原久男氏(天理大学教授)に考古学における事例について、平藤喜久子氏(國學院大學教授)にポップカルチャー等における事例について、それぞれのご専門分野の見地からご教示をいただいた。お忙しい中を貴重な時間を割いてご協力くださった先生方に、この場を借りてお礼を申し上げます。

第6回万葉文化館主宰共同研究概要報告（井上）

実施した研究会は下記のとおりである（肩書きは当時）。

第1回研究会 平成29年（2017）8月24日（木）

「神話の視覚化に関する比較文化的研究—記紀万葉を軸に—：神話をどう記憶（記録）したか？」

井上さやか（当館指導研究員）

第2回研究会 平成29年（2017）8月25日（木）

「庭園による異世界の具象化」大谷歩（当館主任技師）

「一研究展望—日本古代における“神話”と絵画表現」吉原啓（当館主任技師）

第3回研究会 平成30年（2018）3月16日（金）

「神話の視覚化か視覚の神話化か—猿田彦と王の舞—」橋本裕之氏（元追手門学院大学教授）

第4回研究会 平成30年（2018）3月17日（土）

報告「文化による図像表現の活用の違いとその理由」松村一男氏（和光大学教授）

報告「仏像の宗教学的研究の可能性」君島彩子氏（国際日本文化研究センター博士課程）

第5回研究会 平成30年（2018）3月18日（日）

「近代絵画に描かれた「歴史」、その中の神話モチーフ」菅原真弓氏（大阪市立大学大学院教授）

「絵画に見る弥生人の精神世界」橋本裕行氏（橿原考古学研究所企画課長）

第6回研究会 平成30年8月18日（土）

「記紀万葉と欧文挿絵本とジャポニスム」井上

第7回研究会 平成30年8月19日（日）

「古代日本における神話の視覚化とその変遷」吉原

「古代日本における神仙世界の具象化—〈みなし〉の世界—」大谷

第8回研究会 平成30年11月3日（土）

「祭礼と神話—彌美神社の例大祭で考える—」橋本裕之氏

第9回研究会 平成30年11月4日（日）

「弥生絵画を読む—弥生土器と銅鐸の絵画に表現された「神話」?」桑原久男氏（天理大学教授）

第10回研究会 平成31年3月16日（土）

「図像にみる神意識—ポップカルチャーを手がかりに—」平藤喜久子氏（國學院大學教授）

第11回研究会 平成31年3月17日（日）

総括及び成果発表についての打ち合わせ

先述のとおり、本共同研究では複数分野の研究者間で、「神話」とはなにか、それをどう「視覚化」したかが常に議論された。そうした議論自体が、これまでになく視点をもたらしたのではないかと考えている。

結果として、日本文化は海彼の文化に比べて神像や英雄像をあまり造形せず、古代において神像らしき造形があっても明確に「神話」を基にしたと心得る絵画や彫刻も指摘し難いことが確認され、それには日本の神観念が深く関わっていると考えられた。一方で、仏教美術が入ってきたことにより、少なくとも平安時代には絵画や彫刻による神像が造形されるようになり、さらに近代においては近代国家への道程と軌を一にして「歴史画」が描かれていったことが確認された。一方、弥生絵画の背景に「神話」があった可能性や、古代日本における庭園や建築物などがいわば「神話」の世界観や他界観によって造形されていること、儀礼や芸能が「神話」の再現・再生としてとらえ得ること、さらには視覚化されたことによって逆に文字資料に影響を及ぼし、後世において記紀神話が再構築されたことも指摘された。これらの詳細については各論を参照されたい。

なお、本共同研究の成果の一部は、令和元年(2019)11月2日(土)に公開シンポジウム形式で公表し、その際には当館所蔵の関連古典籍も展示した。概要は下記のとおり。

【第16回万葉古代学公開シンポジウム】

日 時 令和元年11月2日(土)14:00～17:00

会 場 奈良県立万葉文化館企画展示室

テーマ 「聖なるイメージの東西」

概 要 報告

「総論／記紀神話と欧文挿絵本」井上さやか

「文化による神話図像表現の違いとその理由」松村一男氏

「描かれた日本神話—日本近代の「歴史画」に見る」菅原真弓氏

「神仙世界の具象化—古代日本庭園における〈見立て〉の文学—」大谷歩

「龍田風神祭の祝詞に見る神話の視覚化」吉原啓

ディスカッション

【奈良県立万葉文化館所蔵関連古典籍展示】

日 時 令和元年11月2日(土)13:30～17:30

会 場 奈良県立万葉文化館企画展示室

内 容 『磯敷廬嶋日記』1冊 明和7(1770)年

『皇国開闢由来記』4冊 万延元(1860)年

『岩戸神樂ノ起顕』3枚揃 無刊記

『出雲国大社之図』3枚揃 無刊記

『前賢故実』20冊 無刊記

『Japanese Fairy Tale Series』(第1期シリーズ)20冊 明治18(1885)～29(1896)年

一般に向けた公開シンポジウムと関連古典籍展示は、想定していた以上に好評を得ることができた。

4 おわりに

はじめにも記したように、本共同研究では文学の根源に関わる問いとして、「神話」の画像(イメージ)を捉えようと試みた。意欲だけが先走り、ご参加くださった先生方には多々ご迷惑をおかけしてしまうこととなった。ひとえに研究代表者とは名ばかりの筆者の力不足である。あらめてお詫び申し上げますとともに、ご協力くださったすべての方に心から感謝を捧げたい。

日本国内では文学不要論も取り沙汰される昨今だが、既存の価値観や社会通念を問い直し、人間の根幹を為すものを考究するのが文学研究である。本共同研究で取り上げた「神話」の「視覚化」という問題は、その一端を示し得るのではないかと考える。

注

- (1) 『万葉古代学研究年報』(第15号)奈良県立万葉文化館、2017年3月
- (2) Chamberlain, Basil Hall (1882). *A Translation of the 'Ko-ji-ki', or Records of Ancient Matters.* suppl. Yokohama.
- (3) グリフィス大学の考古学チームが『ネイチャー』に発表(BBC News 2019年12月13日配信)
- (4) 木村重信『はじめにイメージありき—原始美術の諸相』岩波書店、1971年

第6回万葉文化館主宰共同研究概要報告（井上）

- (5) 布施英利『洞窟壁画を旅して—ヒトの絵画の四万年』論創社、2018年
- (6) 後藤明『世界神話学入門』講談社現代新書、2017年
- (7) 及川智早「イザナキ・イザナミ神交合譚の近代における受容の一側面—婚礼の象徴としての男女神の図像—」（『古代文芸論叢』おうふう、2009年〔『日本神話はいかに描かれてきたか—近代国家が求めたイメージ』新潮社・2017年〕所収）など。
- (8) 出版後20年間の学術動向に言及した「学術文庫版あとがき」を加えた『神話学入門』（講談社学術文庫、2019年）としても出版された。